

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑭ 「開く」ことと「閉じる」こと

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

私は更生保護官署職員として 25 年以上奉職しつつ、様々な御縁に恵まれ、薬物依存症からの回復を目指すボランティア団体を皮切りに、社会的養護、災害からの復興支援、少女や若年女性をはじめ生きづらさを抱えた方々の孤立を防ぐ活動の端に加えていただいています。また、大学で学んだ福祉の知識だけでは制度変更の多い福祉制度に対応できないということを感じたことで、卒業時に受験資格のみ取得していた社会福祉士の国家試験を奉職後に受験し、その後に更に短期養成施設（通信）で学ぶ機会を得て精神保健福祉士の資格を取得したことをきっかけに、職能団体の活動等の中で隣接多領域の方との学びを深める機会もいただきました。

20 年以上にわたる家族介護の経験もまた、家族が様々な介護保険サービスを受ける立場を実際に体験しこうしたサービスの在り方を受け手の側の視点から考えたり、同じ介護を経験した御家族との交流の中で本当に大きな支えをいただいていることに感謝しています。

こちらへの執筆も大学時代から学んできた家族療法によっていただいた御縁によるものです。業務としては行政説明に関することや教科書的なもの、実務に関する報告や考察といったことを書かせていただくことが多い

のですが、こちらでは更生保護行政に関わらず、業務やボランティア活動、家族介護などを通じて感じたことや考えたことを幅広く書かせていただく貴重な体験であると感じています。

今回は「開く」ことと「閉じる」ことというテーマに私論を述べさせていただきたいと考えています。

1 「開く」とは

「開く」ということには多様な意味があると考えます。例えば、

- ・自分の抱えている課題等を「開く」する
- ・自分の専門知や得意な分野を周囲と共有するために「開く」
- ・自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」
- ・自分の所有している時間や経験を社会のために「開く」
- ・自分が管理しているスペースを公共活動、居場所づくりのために「開く」

など、少し考えただけでも、多様な考え方や方法があると思われます。ただ「心を開く」という言葉からもわかるように、「開く」ために

は、「開く」相手（関係者、自分の属している組織、地域社会など）に対する信頼感がベースにあると私は考えています。

今回は、最初に挙げた例をベースに「開く」ことについて考えていきます。

①自分の抱えている課題等を「開く」

書いてしまえば簡単ですが、実は難しいことだと思われまます。課題を抱え込み自分だけで対処しようとした挙句にそれが「問題」となり、家族「だけ」など限られたメンバーだけで解決しようとしているうちに状況がどんどん悪化していく例は、例えば我々刑事政策の現場でも、介護殺人などの事例において見受けられます。

事件が起きてから「なぜこうなる前に助けを求めなかったのだ。」ということは簡単でしょう。しかしその言葉には、助けを求めなかった者に対する非難（発言者の意図に関わらず）が含まれているようで、私は当事者にとっては厳しい言葉だと思います。私も含めてですが、日本では「他人様に迷惑をかけてはいけない」と言い聞かされて育った方がある程度の年代までは少なからず存在します。「三つ子の魂百まで」ともいわれますが、幼少期に言い聞かされた言葉というのは、実は思いのほかその人の生き方に影響を及ぼす部分が多いのではないのでしょうか。

2019年6月に都内で発生した76歳の実父による44歳の長男の殺害事件は、実父が政府の元高官でもあったこと、長男が長年ひきこもり状態にあり家族への暴力もあったことなどから、いわゆる8050問題と関連して語られるなど、様々な議論を起こしました。私が注目したのは、この家族が（医療機関の受診はあったようですが）この実父が自分自身は長年暴力を受けながらも耐えておられながらも、直前に発生した他県での小学生への襲撃行為に

類することを長男が実行するのではないかとということで危機感を募らせ犯行に及んだことでした。おそらく様々な関係機関に関する「知識」はあったかもしれませんが、実際に「助けて欲しい」と声や手をあげるだけの力（援助希求力）を発揮するだけの力や気力、気運がこの実父から犯行時には既になかったのかもしれないということでした。この実父の年代から察すると「他人に迷惑をかけない」ことをおそらく厳しく躰けられてこられたのかもしれないと考えると、父子双方、そして残された家族にとっても痛ましい事件であったと思いますし、現在「ひきこもっている」当事者の方やその家族が被られた痛みもまた大きなものであったと思われまます。

「自分の抱えている課題等を開く」ことは、相手方への信頼感はむろんのこと、

大変な勇気がいることです。

私事になって恐縮ですが、私も奉職後実母の度重なる病気、特に入院が長期間に及んだクモ膜下出血等については、職場に切り出す際は申し訳なさいで一杯でした。手術が重なった時期に勤務を同僚に交代していただく事態となったこともあり、「働き続けることが迷惑ではないのか」まで思いつめました。当時は人事交流職員として更生保護官署を離れていたこともそうした思いを強めていました。

そうしたなかで、病院に駆け付け、持参したお弁当を差し入れてくださり「今仕事をやめたらあかんで。なんとか続ける方法を考えよう」と言ってくくださった先輩、勤務の交代できつい思いをしながらも日々の業務を支えてくださった同僚や配慮してくださった上司など、「自分の抱えている課題等を開く」ことによって、多くの方に支えていただきました。そしてただ支えていただくだけではなく、「更生保護官署に帰ってこの現場で体験したことを活かしてくれることがなによりだから」といっ

た言葉かけをいただいて、一方的に助けていただくことの申し訳なさが少し軽減しました。制約のある中であってただ助けられるだけの存在ではなく、自分が役に立つことができる存在でありたいという気持ちも痛感しました。

以後私は家族介護従事者として勤務を続けることになりました。介護する相手方やその状態はその時々で変化しましたが、基本的には自分の介護の状況についてはオープンにしてきました。突発的に休まなければならないこともありましたが、前倒しで仕事を進めていくこと、情報の共有化を工夫することで、周囲への影響を最小限にすることもキャリアを重ねるに従ってスムーズにできるようになっていったと思います。

また、在宅介護が長くなると、同僚や上司から介護に関する相談を受けたり、情報交換をすることも増えてきました。介護保険制度下のサービスは自治体独自のものがあることも踏まえて相談などに応じる経験が、後の「司法と福祉との連携」等の場面でも役立ったと思われる。

ただ、自分の抱えている課題を他者に「開く」ことは、自分の「弱さ」を明らかにするという側面もあるので、できれば避けたいという考え方もあると思います。ただ、どんなに頑健な人であっても、病気やケガは避けられませんが、過剰に「強くあること」を求めていくこともまた、生きづらい人々を増やすだけではなくと危惧しています。また、家庭を営む上では様々なアクシデントがつきものです。

私自身も同僚や上司等から個人的に相談を受ける相手方は「これまで相談できなかった」「誰に相談していいのかわからなかった」という男性の方が多かったように感じており、男性に「強さ」を過剰に求めることもまた危うい面があると感じています。

②自分の専門知や得意な分野を周囲と共有するために「開く」

まさにこの「対人援助学マガジン」がそうですが、対人援助の現場には「その道のプロ」とも呼ばれる突出した技能をお持ちの方がいらっしゃいます。私は保護観察官になった頃には既にダルクや依存症治療に対応する病院等との連携をボランティアとして始めていたので、「社会資源に強い人」と呼ばれたこともあります。ただ私自身としてはこの当時から「地域にある様々な関係機関とのつながりが個人的なもので完結しては、その人が異動（転勤）すれば、関係が切れてしまう。新年度異動で着任してきた職員であっても地域の関係機関の把握が容易にできるようにしておく方が望ましい」と考えていました。そこで様々な関係機関についての情報をファイリングし、実際に連携する際の留意事項などを異動で新しい官署に着任する都度作るように心がけてきました。最初に始めたのが20代半ばの頃ですから、こうした若手の提案を支持してくださった当時の先輩方には感謝に堪えません。

基本的には全国画一の制度で運用されている刑事政策とは異なり、福祉関係は都道府県の独自性があります。介護保険制度1つにとってもいわゆる「横出しサービス」「上乗せサービス」などと称される自治体独自のサービスがあります。そうした情報を整理しておくことがスムーズな業務に繋がると考えています。今は紙媒体からデジタルによるものが主流になりましたが、こうした情報の共有化については一層強く意識して業務を進めているところでもあります。

また、私がボランティアとして活動する際には、オリジナルの名刺をパソコンで作成して使用しています。所持している国家資格などを明記し、裏面に主たる活動やそれに関連

する事項（例えば薬物依存症者の家族に対する相談電話の電話番号など）、直近の著作や論文などを記載しておくことで、当該分野に関する知識が必要な時にはメールその他で気軽にお尋ねいただけるような工夫でもあります。

ただ、この「開く」に関しては、「開く以上は自分自身も常にスキルアップや情報収集が必要」であるので、その点については一定の覚悟や備えが必要であろうと考えています。ただ、どのような組織も、単に役職だけではなく、個々のメンバーの得意なこと（パソコン関係、運転関係、物品の修繕関係等、応急措置のスキル等）を持ち寄って回っている部分があると思われ、それを考えれば「お互い様」という面も多分にあると思われます。私自身は、パソコン関係にはついては非常に疎く、オンラインでの学会参加等は戸惑うことばかりでした。しかし詳しい職員や職能団体の仲間に助けをもらい、本当にありがたいと思っています。ベストセラーになっているオンライン研修等のマニュアルには掲載されていないような些細な疑問や失敗についても、敢えてそれを共有することで、コロナ禍以降新たにオンライン研修やオンライン学会に参加する方の参考になるように、これも「開く」ようにしています。成功体験だけではなく失敗体験や「こうしておけばよかった」という体験を「開く」ことについては、相手方や社会に対する一層の信頼感がなくてはできないことだと感じています。

③自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」

日本は欧米に比べて寄附文化の定着が遅れているのではないかという説もありますが、実際には様々な方法によって、自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」環境が整っています。私が関わっている法人でも、「遺贈」という形で提供された民家を子ども

たちの社会的養護のために使わせていただいていたたり、活動の趣旨に賛同された建物の所有者の方から活動場所を提供していただいているといった例もあります。

そこまで大きなものでなくても、ある活動をしている団体の趣旨に共感しているのであれば、実際にその活動に常時参加できなくても、会員（サポーター）になったり、寄附をしたりといった形でその活動を支えることができます。会員には会報等が送られてくることが殆どで、今回のコロナ禍の時には緊急支援の呼びかけが行われ、関わっているサポーターが様々な形で知恵を絞って対応しました。

ケン・ローチ監督の『私はダニエル・ブレイク』でも登場する「フードバンク」も、近年は公共機関に窓口が設置される例もあるなど、身近な存在になってきています。必要な食品を必要な方に届け、食品ロスを防ぐという意味で非常に意義のある活動です。

私自身もいくつかの「フードバンク」の活動に参加させていただいていますが、そこで感じたことは、寄附された食品を適切に管理し、仕訳を行い、必要としている方に届けるといった様々な段階において、多くの人手を必要とし、実際に多くの方々が活躍されているということです。「フードバンク」活動への協力は、この点に思いを致しておく必要があるということです。

私は、ある程度関係が深まっている団体さんとは連携を密にして、現段階で必要なものは何か確認し、保管庫などの空き状況などのタイミングを伺ってから寄附をするようにしていました。特にコロナ禍の状況下では、平時と異なるニーズも多く発生しましたし、フードバンクの活動も感染リスクを抑えるようかなり神経を使っておられましたので、フードバンクに物品を託す側にも配慮が必要だと感じています。

また、私は東北地域からの単身赴任者ですが、仙台等では「みやぎ生協」さんのフードバンク活動が幅広く行われています。私に関わっている団体もお世話になっています。しかし実際に仕訳作業などに参加することは難しいため、介護帰省等をした際に生協さんの店舗を利用し、その際にレジに設置されている各種寄附に対する意思表示カード（フードバンクのほかにもユニセフなどもあります）を提示して、御恩返しのつもりで少しでも寄附をさせていただくことにしています。こうしたシステムは志のある市民にとって寄附へのハードルを下げる仕掛けでもあると考えています。

現在は様々なポイントが付くカードなどを導入している店舗やショッピングサイトもあります。私も重量のある物や専門書を購入したり、買い物難民となりつつある義実家に頼まれて日用品等を届ける際にはそうしたインターネットのショッピングサイトを利用しています。意外と早くたまるこうしたポイントをきちんとためておいて、一定程度溜まった時点でボランティアとして関わっている団体に声をかけ、スタッフさんやメンバーさんのニーズを確認した上で、必要なものを購入して送ることをこつこつ続けています。

団体の会員やサポーター、寄附などを行う際には、自分が継続してできるかどうかというものの見極めも必要かと感じています。例えば、社会的養護を行う施設等には、決して高価ではありませんが、スタッフさんからニーズもうかがいながら「同じ時期に毎年送る」ことを続けるようにしています。社会的養護の枠組みのなかで処遇されている子どもたちは、安定した人間関係を経験する機会をあまり得られない過酷な状況で生活してきた例も少なくありません。もちろん子どもたちの入れ替わりはあるとしても、当該団体やそこに関わ

るスタッフさんや子どもたちを変わらない姿勢で応援しているという大人がいるということで、子どもたちの社会への信頼を取り戻す一助になればという思いがあります。ちなみに私は、毎年夏には東北尾花沢のスイカ6Lを送ることに決めています（さすがに今年は手続きの前に、個別に食べられるスイーツにするかどうかスタッフさんと相談しましたが、結局スイカに・・・）。その結果、「スイカの三浦さん」と呼ばれています。通りすがりの大人ではなく、こうした呼称でよんでいただけることはうれしいことだと思っています。

④自分の所有している時間や経験を社会のために「開く」

民生委員や保護司などの地域ボランティアの定員割れが続いています。特に私が働く更生保護の世界では、保護観察対象者の処遇を保護観察官と保護司との協働態勢で行っていますし、更生保護や再犯防止について地域の方々に理解を深めていただく広報啓発活動については、地域住民としてのネットワークや活動力をお持ちの保護司等の方の御尽力なしでは前に進みません。私自身、奉職後保護司を始めとする更生保護関係者の方々の活動に、「これこそ地域社会のプロ」だと感銘を受けたり、その志の尊さに学ぶ機会が数えきれないほどありました。保護司を定年まで続けられ退任される保護司の方から「保護司活動を続けてきてよかった」というお言葉をいただくと、更生保護官署で働くものとして頭が下がる思いがすることも多々あります。

しかしこうした地域社会の変容とともに、こうした地域社会での核となるような方を見出すことが年々難しくなっていることもまた現実です。

私自身のボランティア経験も保護司等更生保護関係者の方々のお姿に触発されてスター

トした部分が多いのですが、その活動の多くが夜間あるいは週末といった勤務時間外だったからこそ続けてこられた部分が多いと思います。

専門職がその知識やスキルを活かして実施するボランティア活動である「プロボノ活動」についても、所属する組織で一定期間の活動が認められていたり、夜間・休日を使って行われることにより、時間的な制約という点では活動しやすくなっているのかとも感じています。

地域性を重視されるボランティア活動においては、平素から地域社会に根を下ろしそこで生じる課題について向き合い、地域内ネットワークで対応してこられた経験が活かされることが多いものでもあります。自戒を込めて述べるのですが、自分の住む地域を良くする活動に真剣に取り組もうと、自治会（これは余談ですが、関東では自治会については町会と称されることが多いようであり、関西人の私は最初「懲戒？こわっ」と思ってしまいました）や社会福祉協議会福祉委員や苦情解決第三者委員の活動をしていた時期もあります。これらの活動に真摯で向き合ってみると本当に地道で細かなことが多くあると実感しました。幸い会合が夜間・休日でしたのでなんとか活動を続けることができましたが、仕事や介護帰省とのやりくりが難しいと感じた場面もあり、長年続けておられる方に頭が下がる思いがしました。

ただ、実際に体験してみると、③で述べた「自分の所有している財産や資産を社会のために「開く」ことが、地域を特に選ばないことに対し、こちらはまさに地域密着であるがゆえに、様々な地域課題が見えてくることも少なくなく、例えば子育て中の方などの発言からは（昼間は地域にいない）私が見落としがちな貴重な指摘もあり、もし私自身が転勤（転

居）の多い職種でなければ、もっと深く関わりたいと感じたこともあります。

また、クラウドファンディングなどでの社会貢献が志を同じくするもの同士のゆるやかなつながりであること、非対面型であることに対し、地域ボランティアは対面型かつ組織としての活動が重視される側面があると考えます。支援の最前線に立つ活動は本当にやりがいを感じられるものですが、それを成り立たせるためには、会計等の運営に関わるスタッフの尽力が不可欠です。組織運営への協力や組織間のコミュニケーションといったことが必須となってくる地域活動ボランティアについては、希望者を募集する際も参加を検討する際もこの点に留意すべきであろうかと思えます。

ただ、特にそうした地域活動ボランティアの組織に所属していなくても、自分の暮らす地域社会に対してちょっとした目配りをすることはできると思われましてそれこそ今の社会には求められているのではないのでしょうか。その際に重要なことは、地域社会で起きている物事を「問題」としてとらえるか「課題」としてとらえるかということだと考えます。「問題」としてとらえてしまえば、その時点で自分とその出来事を切り離してしまい、「責任者出てこい！」という姿勢に傾きがちで、「問題を除去する」排除の姿勢につながりかねません。

地域社会に目を凝らしてみれば、実は多くの「地域課題」が明らかになってきます。コロナ禍でメディアの露出が増えた「ステイホームが不可能な子どもや若年者」「生活に困窮している方」などは、コロナ禍以前から存在していました。コロナ禍はそうしたことを顕在化して我々の前に提示しているのです。これに対して我々はどう応えるのか。まさに生活の在り方の根本が問われていると考えています。

⑤自分が管理しているスペースを公共活動、居場所づくりのために「開く」

私が関わっている団体の多くが、こうやって「開く」ことを決意していただいた方々の思いによって支えられています。私の経験の範囲内ですが、薬物依存症者の回復施設である「ダルク」を開設・移転する際の物件探しのハードルは非常に高いものがあります。加えてそこに「ダルク」があるということに対して地域社会の方が不安に思われる場面にも遭遇しました。基本的には話し合いで理解を求めていくしかないと考えていますが、実際の回復を目指す当事者の姿を知らない方にとっては「依存症当事者」のイメージが現実とは異なるものであることも痛感しています。これは障害者施設等の開設・移設等でも往々に発生する地域コンフリクトであり、ニンビズムでもあると考えます。そうした中で自分が管理しているスペースを「開く」決断をしてくださった方は、様々に地域との関係性なども熟慮の結果と考えられ、感謝に堪えません。

ただ、実際に「開く」ことによって、「開く」ことを決断してくださった方はもちろんのこと、その地域社会全体が、その居場所を利用する人を知り、活動を応援してくだるようになったという例もあります。コロナ禍の現状下ではありますが、

「まちの保健室」と呼ばれる、困りごとを抱えている人が気軽に立ち寄れる場所を開設し、単に健康相談やカウンセリングを行うだけでなく、様々なアクティビティを提供することで、そこに暮らす人々の生活の活性化に大きく貢献している取組もあります。「かつては隣近所との交流も頻繁で、味噌や醤油も貸し借りしあった」「お互いの子どもを預け合った」という言葉を聞くこともありますが、今はそうした交流や居場所については、何らかの仕掛けが必要であるとも考えます。

2「閉じる」

「閉じる」にも明確な定義はありませんが、私は以下のように感じています。

- ・自分だけ、家族だけで完結しようとする事。
- ・自分だけ、家族だけが安全安心であればよし、地域社会に対して「目を閉じる」

①自分だけ・家族だけで完結しようとする事

様々なインフラが発達し、その気になれば家を出ることがなくても生活を営むことができます。しかしそれを享受できるのは、インターネットなどを使うスキルと経済的な余裕がある層に限られますし、基本的には家族メンバーが健康であることという条件付きのものだと私は考えます。平素から外界との境界が必要以上に固い家族は、いざ自分たちだけで解決できない課題が発生した時に、現実社会の支援窓口に対して「助けて欲しい」と手を上げることができるのでしょうか。私は奉職後阪神・淡路大震災と東日本大震災を経験しましたが、その後の防災対策を検討する際に何度も耳にしたのが「平時できないことは非常時にはまずできない」ということでした。外界（現実の支援機関）とのつながりについても同様のことがいえると私は考えます。私は20年近く、薬物依存症者の家族のためのミーティングに関わり、平成半ばからは刑事政策に特化したグループを立ち上げました（現在は専用回線による電話相談に移行）。その際に実感したのは、こうした支援の場を何らかの形で知りえたとしても、実際にその場に足を運んで参加するのは相当の覚悟がいるのだということでした。グループが紹介された記事を財布に入れ、何か月も迷った末に相談にやってきたという御家族を多く見てきました。「恥ずかしい」「世間に知られたら」という思いが先に立つことは無理のないことだと思われま

す。今の日本社会は、多様性をうたいながらも同調圧力が強いという一見矛盾した部分があるので、例えばひきこもりや依存症など「普通の家庭で起こりえない」（そんなことはとは珍しいことではありません。また、支援機関での最初のつながり方がうまくいかず、不信感や傷つきを抱えている家族も少なくありませんでした。私は前回の連載で家庭を営むことについて触れましたが、現代社会において家族だけ・家庭内だけで対応可能な課題はさほど多くはありません。そうした意味では、家族・家族内で「閉じてしまい」そこで完結しようというのはむしろ幻想であり、これから求められるのは、困った時には適切な相手に相談するという援助希求能力を高め、平素から実践していくことではないでしょうか。

②自分だけ・家族だけが安全安心であれば良しとし、地域社会に対して「目を閉じる」

コロナ禍のなか、ステイホームという言葉が「家庭回帰」という解釈をする向きもあったように思います。ただ、極端な例では「自分だけ・家族だけが安全安心であれば良い」という考え方で、マスク等の買い占めが発生し、医療従事者等のエッセンシャルワーカー等が差別されるという非常に悲しむべき事態が発生しました。

これこそ地域社会に対して「目を閉じる」典型例だと思います。「私だけ」「私さえ」という概念が先行すると、いつしか「私たち」という連帯を示す概念が弱体化し、こうした災害時に人々の生活を支えてきた地域社会の弱体化につながるということを私は危惧しています。

コロナ禍の中でも、より厳しい状況の中に置かれている方のことを思いやり、感染拡大防止に配慮しながらマスクづくりや子ども支援に心を砕いている方の姿を私は数多く見ていますし、その姿に触発されて活動を共にさ

せていただいたこともあります。一方で、マスクの買い占めや果ては転売までに奔走する人々の姿も見受けられました。不安を煽られた結果の行動と思われませんが、果たしてどちらが自分自身にとっても社会にとっても建設的なコロナ禍への向き合い方だったのかということを考えさせられます。

「私だけ」「私さえ」という考え方のの人にとっては、先述1①～⑤で述べたような「開く」ことは理解しがたい考え方のように思われますが、私は両者が分断される社会もまた不幸な社会であるとも感じています。

様々な考え方があることを前提とした上で、自分とは違う考え方や行動様式があることを認め合い、お互いを知ることから、「新しい生活様式」をベースにした地域社会が構築されていくのではないのでしょうか。